栂牟礼城の規模と構造

弥生　小野英治

栂牟礼城は郷土の歴史上、有名な戦国山城であるが、近世城郭と異なり、歴史物語等の記録はともかく、城郭そのものについては、当然ながら、当時の古図、古記録等は皆無といってよい。それだけに今日でも不明な点が多く調査研究が大変遅れているといえる。

ただ、未知の部分が多いという事は、興味ある城跡という事でもあり、登山の度毎に新発見をするようなものである。しかし、雑草木の繁茂する山岳とあって、その調査は大変に困難であり、詳細については、未だ不明な事が多いのであるが、一応の調査をしたので、その成果を発表し、規模、構造について考察してみた。

栂牟礼城には、石垣が使われてなく、人工的に山上を掘削し曲輪（くるわ）を設け、その周囲を切取り急傾斜面（切岸）とし防備を固め、要所に多数の腰曲輪を、さらに尾根には堀切、周囲の斜面には竪堀を連続して設け、一部に土塁もみられるというのがその特徴である。

なお、栂牟礼城は普通に標高二二三、七米の主峯（城址碑、三角点あり）をいっているが、この南西方向約七〇〇米地点の支峯に砦があるので、一応これも含めた。

城跡には現在道らしい道はなく、どの方面からも容易に登山出来ないというのも守備中心の城として注目される事であろう。

以上は全体的特徴であるが、次に縄張、曲輪の特徴についてであるが、本城は南北に長い山頂を削平し、北高南低に曲輪を段状に配置している。この本城を便宜上、本丸、二ノ丸と区別したが、詳細に見れば、本丸は一米程の段差があり、上段と下段に分れ、上段は南北約四〇

小田山砦より本城を望む
（左手本丸　右手２ノ丸）

米、東西約一二米でこゝに標高二二三・七米の三角点、城址碑、古塔寺がある。下段は南北約三五米、東西約一二米となっており、この約五米南下に南北約八米、東西約六米の小曲輪があり、この間には巾約二米、深さ約一・五米の堀切がある。さらにこの約二米南下に接続して南北約九米、東西約八米の小曲輪があり、この曲輪の東側には土塁がある。この曲輪の南下約二・五米から、

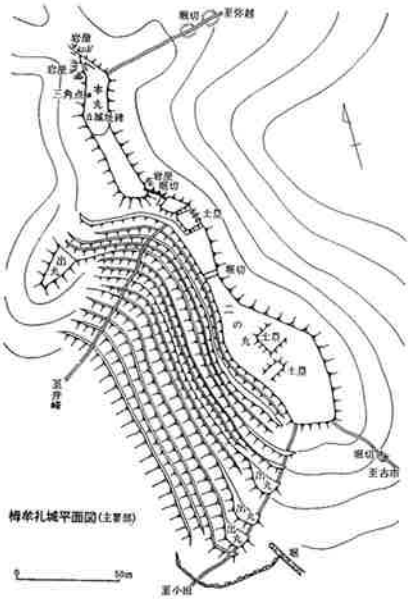


図1

南北一一五米余、東西最短六米、最長三四米程の曲輪があり、これを二ノ丸と呼称しているが、二ノ丸と接続する小曲輪法尻(のりじり)より約一二米南方地点に巾五米、深さ約一米の堀切があり、こゝより三五米南方に、下底一二米、上底一一米、高さ約一米の土塁があり、さらに四米南方に下底五・五米、上底五米、高さ約〇・八米の土塁があるが、この二つの土塁は、兵法にいう、所謂一文字土居のようであるが、往時は現状よりもだいぶ高い土塁となっていたのではなかろうか。これより南北約三五米、東西約二七米程の曲輪があり南端に古市方面へ下る道がある。

以上のように、二ノ丸は土塁と堀切により三つに分れている事がわかるが、二ノ丸より最高所の本丸への道は急斜面の切岸となり容易に登れない。また二ノ丸から本丸に向い左手に巾約三米の広い道があり、あたかも本丸へ通づる道のようにみえるが、これは左に曲り約五〇米でついに消滅してしまう道である。この道に入った敵は上方の小曲輪、本丸下段よりの攻撃を受け進退に窮し遂に撃破されるという事になる巧妙な縄張となっているのである。

なお、この本丸、二ノ丸の周囲は急斜面となり容易に寄りつけないが、ただ二ノ丸西面のみ岩崖のない粘土質の比較的緩斜面となっているため、段々畑のように多数

の腰曲輪が設けられ、その左右には出丸で側防がされているのは注目される防備である。

次に本城は本丸の西北、北、東北、東、二ノ丸の南、西の各方向へ尾根が続き、弱点となっているため、こゝにはすべて連続して多くの堀切が設けられている。往時は不便でも道はこの尾根を利用していたものと推測され現在も小道がみられる。また、二ノ丸の南東面中腹に、三ケ所の連続する竪堀（深さ約二米、巾約四米）、同北面中腹にも一ケ所の竪堀が雑木林の中に確認されている。

堀切で最も注目されるのは、弥生町大字小田と大字井崎の境界をなす尾根を堀切ったものである。完全に堀切ったもの五ケ所、小田方面の片方のみである竪堀となっているもの二ケ所の計七ケ所の堀が連続しているのは大変壮観で、特に小田方面の斜面はすべて竪堀となっているのは注目される。

七つの堀が連続するのはこゝだけであるが、『栂牟礼実録』の「臼杵近江守圍栂牟礼城事」に

或時、寄手の兵、七つ堀口に打出せし処、城内より深田一党の者共、他人を交ぜず進んで呼はりけるは、某等は深田伯耆が親族也。先達て主人薩摩守が使として、深田伯耆府内へ罷越候処、千手堂の旅宿へ押寄、大友家の御差ずかは不存候へども、実否を糺さず無體討取候事は、御手柄とや申すべき。和漢共に軍使を討ち候

事めづらしく覚え候。併、府内どのの家法には有之候哉。一族ども無念の一矢参らせ候間試むべしと云程こそあれ。強弓共さし詰引詰、雨霰の如く、矢次早に射出しければ、堀際切岸櫓の下、死人の山を築きけり。

とあるのはこの所をさしているのではないかと推測されるのである。

なお、これら堀切の巾は五～六米、特に最長のものは

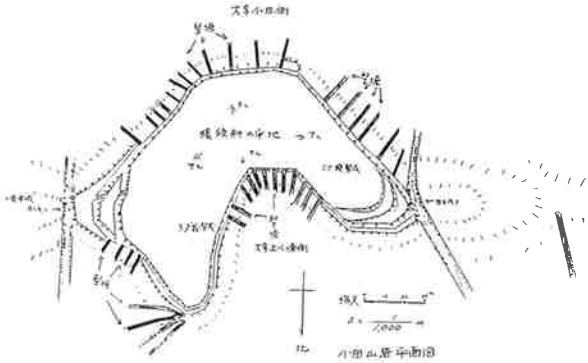


図2　小田山砦平面図

一二米に及ぶが、これは二つの堀切が合体したものであり、小田側斜面には二つの堅堀となって下っている。深さは二～三米、最も深い所で五米に及ぶが、硬質の岩石を掘削した大変な労力を要したものとなっている。

井崎側のこのあたりは「水ノ落ち」と称しているが、これは栂牟礼城の水ノ手であったと考えられ、このあたりの谷には現在冬期でも水があり、大永七年（一五二七）の水ノ手の攻防戦は、あるいはこゝらであったかもと憶測される。

なお、本城側でこの最後の堀の所には、右手に長い切岸が続き、これより内側が城内といった感がある。

以上のようにこのあたりは城側の最も重要視したところである事が容易に理解出来るのである。

次に、この地より峯続きで一山越えた所にある仮称小田山の砦であるが、その位置は弥生町大字上小倉と大字小田の境界にあり、弥生町火葬場の背後の山（標高一七七米）がそれである。

これは特異な砦で、本城の縄張とはいささか異なり、また本城と関連したものでなく独立した砦であるが、本城との間に標高一八一米の山があるものゝこれを隔てゝもよく本城を望む事が出来る。

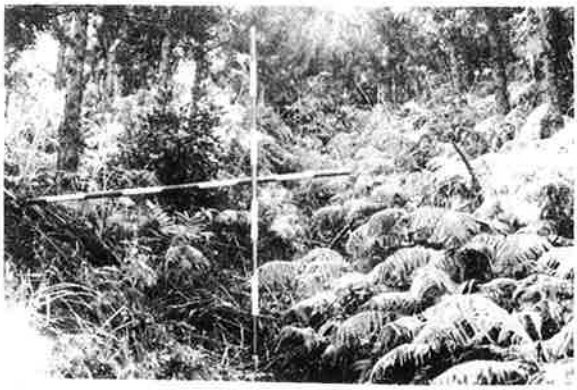
この砦は、山腹を切岸で囲み、東と西の尾根続きには

堀切で防備し、周囲に腰曲輪、竪堀を多数設けているが、山上は完全な削平地となってなく、緩傾斜の山容をそのまゝ残したようなものであり、未完成の城砦、応急の城砦といった感があるが、それだけに実戦向で非常に興味を覚える。

本城に比してこの砦は、竪堀が周囲に三八ケ所もあるが、堀切は二ケ所しかない。その竪堀の巾は、ほぼ二米、深さは平均して一米程と小規模であるが、二つの堀切は、東側が巾五・六米、深さ砦側で二・八米、西側が巾五・五米、深さは砦側三・六米となり、共に小田側、上小倉側は竪堀となって下っている。さらに西方堀切より五〇米程下った所の尾根続きに、上小倉側に下った巾三米程、深さ一・五米程の竪堀も確認されている。

この砦を実戦面で見れば、本城よりの峯続きから攻め

小田山砦の堀切の堀底
（右手が砦側）



小田山砦の竪堀

た場合、堀切で防ぐ事となるが、これを突破した敵が城内に入ると左右に巾二米から三米の道がある。これで左右に分散された敵が進めば共に道は消滅し前方には堅堀が連続し、上方は切岸が迫り容易に攻め込む事が出来ない、これは西側でも同様である。又南面及北面の斜面より攻め登るとすれば、竪堀により左右の動きが出来なくなり、そこを砦より容易に攻撃されるという事になる。

これはずいぶんと飛躍した説となるが、私はこの砦こそ、大永七年、臼杵氏が佐伯惟治を攻めた時に構築した城砦ではなかったかと推測する。というのも、臼杵長景の居城である、臼杵水ケ城とその構造がよく似ているのである。『臼杵史談（五九号）』に、高橋長一氏は「臼杵城考」の中で次のように記している。

今残る水ケ城は頂上を広く削平し南の方に一段高く本丸的な四角形な一部を築き上げている。即ち指揮する塔などあった処であろう。北と南の尾根は大きく堀切ってあり、中でも北の空堀は巾も三間、深さも三間もある程大きなものである。本丸を囲んでせまい帯曲輪もめぐらされている。この城の特色は正面の斜面に帯曲輪から谷に向けて二十三条の溝をたてに掘っていることである。これは三米程な溝で、私は戦時に大木や大石を投下して敵を防ぐ備えと推測している。

又、大友の重臣田原紹忍の居城、宇佐妙見城にも同様多数の竪堀が連続している。

さらに『栂牟礼実録』に

所は野田、小倉山、小田ケ峯、西より北のすみまでは床木山、宮の河内陣所を必死と打継ぎ、大将長景は川俣寺に本陣して、平井、土崎の両山に後陣をかまへ、尾崎、谷の口一旗々々屯を張り。

とある「小田ケ峯」こそこの砦ではなかったろうか、栂牟礼城攻めの付城（つけじろ）として応急に構築されたと以上の理由から推測するのであるが、七つ堀口の事からも当時このあたりは栂牟礼城の守備範囲ではなかったといえよう。

しかし、天正十四年（一五八六）佐伯惟定の時にはどうであろうか、対島津戦に対して栂牟礼本城を守る上で重要な砦となるから、今度は支城として修築されたものと考えられる。比較的大規模な堀切はこの時手を加えられたものであろうか、この砦を小田方面に下った山麓に「下の木戸（しもきど）」という所があるが、これはこの砦の入口を示すものではなかろうか、それは又佐伯氏時代のものとすれば惟定当時に城門があったものであろう。

なお、本城の北東に弥越峠があるが、これは矢越が正当で、中世の城郭では城の守備範囲を示すものであり、現在道路（県道）となっているこの堀切は、当時も城の堀切として存在していたものであろう。さらに本城の北山麓に山下という地名があるが、これは中世武士団の居

住地を示すものであり、この附近に城主直属の武士が居住していたものであろう。

以上私見を述べたが、詳細な調査ではなく誤りもあるのではないかとも思うが、文献史料がないので、今後は発掘調査が必要となってくるであろう。

◎用語解説（鳥羽正雄著「日本城郭事典」による）

曲輪（くるわ）城の一区画をいう。『武家名目抄』に「城郭の体たる一様ならずといへども、おほよそいはば、皆円なるに出ず。故に丸といひ、又曲輪といふなり」とあり。

腰曲輪（こしぐるわ）山城の中段に細長く設けられた郭、平城の場合にも、高低の差は山城ほどではないが、一つの郭の外側にそって巾せまく細長い郭を設けることがある。これは敵を故意にこの郭の中に侵入させ、有効な掃射によって多大の損害を与えようとするものである。

堀切（ほりきり）山の峯つづきの所などを掘って交通が出来なくした所をいう。中世の山城にはその例が多い。

竪堀（たてぼり）山城で山の傾斜に沿って竪に掘った堀をいう。その掘様は、一方を切り立て掘り、両方を緩い傾斜に掘る。このようにすると敵が登って来た時左右がちんばで登りにくい。又竪堀は石弓を落すべき場所に用いるとよいという。竪堀に入っている敵は他に避けることが出来ないからである。

土塁（どるい）城や館のまわりに築かれた土手をいう。垣の一種。

砦（とりで）本城の付近あるいは味方の領内の要所に簡単な小さな城を築いたもの。味方の領内においては、根城から三里ないし五里位出張して設け、敵の来攻の際には、そこで一防ぎするために用いるものである。また敵地を占領した場合に味方の領内から張り出して取った城であるというので取出（とりで）という。

縄張（なわばり）城郭用語としては、塁濠の平面的形態のことをいう。漢語では経始（けいし）という。

一文字土居（いちもんじどい）虎口の城内側あるいは城外側に設けて、敵の侵入を妨げ、あるいは味方の進出を容易にする設備。

水ノ手（みずのて）一城の用水を取る方面をいう。

付城（つけじろ）敵城を攻める際、攻囲軍の拠所として築いた小形の城。一郭ないし二郭位で、土居堀を設けた。これは敵の戦力が強いか、敵の城が堅固であるか、すみやかに敵を屈服させることが出来にくいと思われた場合に、城を築き、味方の軍勢を置いて城を押え、その周辺の地域を鎮圧するためである。

木戸（きど）木製の門戸、城戸の意からあて字として城門のことにも書いた。中世末期の著書である『築城記』には、城門のことを木戸といい、城戸の文字と混用している。中世の城では一の木戸、二の木戸、三の木戸などといった。

支城（しじょう）幾つかの城が一つの組織をなして活動する場合、その中心になる城に従属して、これを補助する城を支城という。